

文化講演録 第二輯

# 和紙のはなし

福井市立郷土歴史博物館



紙名 生漉奉書(薄口)  
抄紙者 岩野市兵衛

## 和紙のはなし

越前和紙伝統工芸士 岩野市兵衛

紙漉き職人の九代目岩野市兵衛でございます。先程、先生とは申し上げて下さらないようにと申し上げておきましたのですけれども、やはり先生だとおっしゃって下さいまして、職人ですから、先生ということはあまり好きな言葉じゃないのでございます。これから申し上げることにしても、職人でございますから何を申し上げるかわからないのですけれども、福井県には、山田誠一先生とか、前川新一先生、それから水島直文先生、向こうにいらっしゃるのですけれども、武生から上坂紀夫先生がいらっしゃるっておられます、こういう紙関係にすぐお偉い方こそ先生でございます。その先生を前にして私のような職人が喋るということはおこがましいとも思いましたが、たまには紙漉く職人の話もいいのじゃないかと思いましたが、それから紙漉く職人であるから聞けることもあるのじゃないかと思ひまして、今日のお話の会をお受けしたようなわけでございます。

思い付きのままにお話をさせていただきたいと思ひますが、まず、簡単に歴史的なことを申し上げます。ただきますと、推古天皇の十八年と申しますと、西暦で申し上げますと六〇一年になります。今年は一九九三年です。ざっと千四百年前だと思ひます。越前和紙は約千五百年の歴史があるということになっており、今皆さんそう申されます。千四百年の四ということ嫌っているのか、なぜか約千五百年ということになってお

りますので、私も千五百年というように申させていただきます。ですけれども、『越前和紙のはなし』（昭和四十八年、越前和紙を愛する今立の会発行）という本を斎藤岩雄先生がお書きになった中に、越前和紙は川上御前という方から習ったということになっているのです。西暦で言いますと、五〇〇年から五五〇年の頃に、越前和紙はもう漉かれていたというようなことがこの本にも書いてございますし、このことを申し上げますと、越前和紙は千五百年と申し上げてもいいのじゃないかなと思います。

それから、越前和紙はある時、私の家からも見えるのですが、宮ヶ谷という山の麓へ一人の女性がお出ましになって、「この土地は田畑も少なく、水が清いから紙漉く技を教えよう」とおっしゃって、地元の紙漉く人に教えられ、ある程度の技を身につけた頃というのですか、お習いした時に、どこからいらっしゃった人でしょいかというようなことをお聞きしましたら、「この川上に住む者」とおっしゃって、それ以来、お姿を拝見することはできなかつたということです。その時から、越前の紙が伝わってきたのだと思います。

紙の漉き方と致しましては、流し漉きという漉き方と、溜漉きという漉き方と二通りございます。流し漉きというのは、黄蜀葵という植物、紙漉き屋の職人は一般的にトロロアオイと言いますけれども、そのトロロアオイは植物ですから花が咲きます。その花は、今皆さんお食べになるオクラというのがありますが、その花に似ているのです。そして、その土の中に生えている根ですね、それを木槌で叩いて水に浸しておくと、トロロというくらいですから粘りができます。その粘りを紙を漉くときに使って漉く漉き方を、後でもう少し詳しく申し上げますけれども、流し漉きと申します。それから溜漉きというのは、このトロロアオイの液体なんかを必要としなくて、ただ水と原料だけを漉き上げるという漉き方を溜漉きと申します。

この二つの漉き方を現在、越前で守り伝えている人の数を申し上げますと、手漉きだけをやっている人が四十四軒ございます。この四十四軒というのは、夫婦だけでやってらっしゃる家も一軒と数え、また三十人も四十人も、ある大きな工場では五十人くらいの職人さんを雇ってらっしゃる家も一軒と数えての四十四軒ございます。それから、手漉きと機械漉きと両方やってらっしゃる家が四軒ございます。ですから、手漉きが四十八軒というような感じでございますね。それから、機械漉きの人が二十四軒。それから、出来上がった紙を加工する人が十四軒ございます。ですから、現在八十六軒ありまして、手漉き関係のお仕事をしてらっしゃる人が二百九十三名、それから機械漉きやら加工の人合わせて、全部で越前和紙は七百三十八人の職人さんで守られてきています。

昔は、全国で約七万軒の手漉きの漉き屋さんがあったそうですが、現在は五百軒を割ったそうでございます。そうしますと、ちょうど計算的に約一割がこの越前にあるということですが、産出する紙の枚数とか、それから値段的なことも、それはもう他の産地に比べものにならないほど素晴らしいものを作ります。ですから、一割くらいの手漉きの業者でありながら、全国の四割くらいの生産高は上がっているのじゃないかと思えます。それから今度は、紙の種類についてお話をさせていただきます。大きく分けて五つあります。一番最初に奉書紙ですね。それから烏の子紙、その次に美術小間紙、それから画仙紙、そしてもう一つ局紙という紙の、この五つに分けられると思うのです。

一番最初に申し上げました奉書のことを申し上げますと、奉書は三つあり、最初は生漉き奉書。生漉きという字は、生年月日の生まれるという字と手漉きの漉きという字を書いて「きずき」と読むのです。生漉き奉書、

これは楮百パーセントでなければ生漉き奉書とはいわない。それから、半草奉書というのがございます。この半草奉書というのは、楮が五十パーセントとパルプが五十パーセントの紙をいいます。それからもう一つは、パルプだけの奉書を、これも奉書といえます。

それから、二番目に申し上げました鳥の子のことを申し上げますと、鳥の子は雁皮と三極の繊維を使ってるのが鳥の子です。ですから、奉書という紙には三極とか雁皮の繊維が入ってませんから鳥の子じゃないのですね。ですから、ちょっと私の言い方おかしかつたかな。鳥の子というのは、鳥の子は卵ですから、その卵の肌に見えるような感じを鳥の子というのですね。ですから、鳥の子という紙には必ず雁皮、または三極の繊維が入ってなければ鳥の子と申しません。

繊維の長さで言いますと、楮の繊維が紙の中で一番長く、平均が約一センチくらいある。細いのですけれども、一センチくらいの長さがあるものなのです。それでは三極・雁皮はどうかといえますと、楮に比べて約五分の一とも言ってもいいくらい短い繊維なのです。ですから、光沢があることは雁皮が一番、その次に三極が光沢がございます。ですから、私は楮の紙を漉いておりますので、楮の紙が一番いい、「紙の王者は楮の紙だ」と私は言いたいのですけれども、雁皮の紙が王者だと思えます。それは、何とも言えない気品がある紙です。紙を譬えますと、楮の紙は繊維が長いものですから、丈夫な紙ができます。そうして、ちょっと見たところ、三極とか雁皮が入った鳥の子の紙に比べて荒々しく感じます。ですから、楮の紙は男性的で男の紙だという人もございますし、三極・雁皮が入っている紙は女の紙。女の紙というのは、女の肌を思わせるというのですか、艶っぽくて柔らかかそうな感じの紙が出来上がるから、男性の紙と女性の紙というように表現なさる

方もあります。

次に、鳥の子には特号から四号まで区分けをさせていただきます。鳥の子特号というのは、紙の漉き屋さんによっては少し違いますが、だいたい雁皮百パーセントのものが特号なのです。それから一号というのは、雁皮が六十パーセントに三極が四十パーセントくらいの混合で出来上がったものを一号といいます。ですから、鳥の子一号紙というのが欲しいとおっしゃいますと、雁皮六十パーセントに三極四十パーセントくらいのものを求めることとなります。二号紙といいますと、だいたい三極百パーセントなのです。それから三号紙というのは、三極二十にマニラ麻十パーセントに、後七十パーセントはパルプなのです。それから四号紙などというのは、マニラ麻が少々には後は全部パルプということで、紙からいいますとだんだん悪くなるのです。

この間も、私の所へ見学に来た人がいらっしたので、「鳥の子には特号から四号までありますが、その何号というのは何だかご存じですか」と言いましたら、「紙の厚さでしょう」とおっしゃるのですけれども、紙の厚さじゃなくて繊維のミックス具合といいますか、混合してある紙の分量のことをいうのです。

それから今度は、三番目に申し上げた小間紙です。美術小間紙というのですけれども、これは模様の紙、それから染紙、それから、最近ではちぎり絵とか和紙人形ですね、そういったものの紙を作る人。それから、カレンダーとか壁紙とか、お菓子の箱張りとか、こういうふうな紙を作りなされる人が美術小間紙の漉き屋さんです。

それから、四番目に申し上げた画仙紙というのは、主に書画用の紙で水墨画とか書の紙、そして色紙・短冊などを表に貼って加工する表だけの紙を、画仙紙の漉き屋さんが漉く。ですから、画仙紙の漉き屋さんですね。

ほかに日本画の紙。これは、だいたい麻紙と書いて「まし」と読みますけれども、現在は、東山魁夷先生とか平山郁夫先生、加山又造先生というような超一流の先生がお好みになる紙ですね。麻紙は画仙澹屋とは別に専門の人が漉いています。

それから、局紙というのを申し上げますけれど、局紙というのは先申しあげました溜漉きで、その溜漉きのことをちょっと申し上げますと、下の枠に金網が張ってございまして、その上へもう一つ枠を乗せまして、原料を汲み上げたときにこぼれないようにする為に上の枠があるんですね。ですから私らの言葉で、下桁・上桁ということです。漉く道具のことを桁といいますから。下桁に金網が張ってございまして、上桁はすくった原料がこぼれないように枠だけのものですね。それを二つ合わせたものでいっぺんに原料をぐっと汲み上げて、そしてこぼれないようにして縦横小さく揺すって、水の切れる寸前まで小さく揺すって、切れたらもう揺すらない、というような漉き方のものを局紙ということです。この局紙は、もちろん今申し上げた溜漉きで、どういった紙かといいますと、学校の卒業証書、耳付名刺、耳付葉書、それからエッチングにお使いになるエッチング用紙、それからクリスマスカードみたいなもの、これを局紙という漉き屋さんがお漉きになります。

今立町の小学校には四つの小学校がありまして、私は今年、粟田部、いわゆる花筐小学校の来年卒業なさる六年生の卒業証書作りをお手伝いしたのですが、初め本番に入る前に、横の所で練習をさせます。そうすると、みんな初めて紙を漉く人ですから、なにか喜んでキャッキヤと紙を漉いています。そうして本番という時には、花筐小学校の場合なら「花筐小学校」と透しが入っておりまして、そして、さらに校章が入っている。マークを入れた枠に上桁をかぶせて漉くのです。そうして二枚漉くのですけれども、二枚というのは、一枚でもよさ



そんなものなのですが、もし乾燥の段階とか、それから印刷の段階なんかで失敗があると（めったに無いらしいのですけれども）困るということで二枚漉かせるのです。一枚教えたとおりにやっつて、小さく縦横揺すのだよということを教えてやると、中にはものすごく上手にやる子がいるのですね。「ああ、うまい。あんたうまいなあ」と思わず言いました。二枚共うまいことやるのですね。これはやっぱり生つきの天性というのですか、そういう上手な子供がいるのだなと、私もそのとき思いましたから、「あんた、とっても上手だなあ。学校終わったら紙漉きさんだ」と言いましたら、みんなその辺にいた人、わっと笑いましたけれども、私はこうい子が紙漉きしてくれると絶対上手なだけどもなと思ひ、つい「あんた、学校終わったら紙漉きさんだ」と、こう言いました。その子が縦に首を振ってくれるかと思ひましたら、横にしか振ってくれない。これが現在の世の中ですから仕方ないのですが、ああいう子供は紙を漉かせることでも腕がよいのじゃないかなと思ひましたね。実に私はこの子供が紙漉いて欲しいなと思ひましたので、ちょっと申し上げたのです。

私は今、肝心なことを申し上げなかつたかなと思ひますけれども、紙屋さんを五つに分けることができるということをおし上げましたけれども、襖を漉いている人は年がら年中襖の大ききの紙を漉いていらつしやる。私は奉書の漉き屋ですから奉書の紙しか漉きません。例えば、先も申し上げたように半草奉書を漉きなされる人は半草奉書を専門に漉いていらつしやるので、模様紙みたいなものはお漉きにならない。ですから、私に模様紙を漉いてくれと言われても、やつた経験が無いのですから、いくら今日の見出しのように「伝統工芸士」と書いてありましても、模様紙はやつたことが無いのですからできません。はっきり申し上げてできません。ですけれども、模様の紙屋さんが私の所へ来ていきなり私の紙を上回る紙を漉いてくれたら、私は頭を下げて

もう辞めるしかないと思います。それくらい奉書は奉書の漉き屋さん、美術小間紙は美術小間紙の漉きさんがずっと専業でやっております。たまに私の家へ「襖紙を分けて下さい」なんていう電話がかかってきますが、それはできませんので、紙屋さんとか問屋さんのお名前を申し上げて、そういう所で見てくださいというようにことを申し上げるのですけれども、私が紙を漉いているものだから、どんな紙でもすぐあるかと思いなさる人もあるでしょう。ちょっとそういうことも申し上げさせていただきます。

それから肝心の、それじゃおまえ、どんな紙を漉いているのだとお思いかもしれませんが、私の紙のことについて申し上げますと、一等最初に申し上げましたように、生漉き奉書、楮百パーセントの紙なので、これは今、何に使われているかと申し上げますと、先ご紹介いただきましたように、木版画用の紙として重宝がられています。

紙の出来るまでのことを申し上げますと、乾いた原料（楮）の十二パーセントのソーダ灰を入れて、約四時間煮るのですね。煮るといっても、こんな小さなお鍋じゃなくして、直径が三尺ありますから俗に三尺釜というのですけれども、直径三尺もあるようなかきお釜でもって楮を煮るのですね。水だけでは煮えないものですから、ソーダ灰を十二パーセント入れて煮るのですね。



煮 熟

それから後は、塵取りといしまして、楮の株が一株あるとしますね。そうするとそこから、毎年十二月頃に刈り取るのですから、春芽が出て、だいたい二メートルから三メートルくらいに伸びると思うのですけれども、その伸びた楮が、私は今、茨城県の楮を使っているのですけれども、今年は関東地方に台風が来しましたですね。ですから、来年仕入の楮はだめではないかと思えます。楮が生えていて風が吹きますと、揺れることによって、きつい言葉で言うところ打撲傷というのですか、すり傷みたいなものがたくさんできるのです。それが楮の表面に



#### 塵 取 り

出てきまして、きれいな楮が出来上がらないものですから、塵取りと  
いって、水の中へ竹籠を、昔は竹の籠でしたけれど、今はビニールの  
籠を用意して、流れる水の中で丹念にそれを一つ一つ取るのですね。  
これがまあ大変な仕事ですから、大量生産はできないのです。

その次に叩解といしまして、その塵を取ってきれいになったものを  
檨の板の上のせて、檨の棒でパンパンと叩くのですね。叩くという  
ことは何でそんなたいへんなことをするかと思ひなされるのですが、皆  
さんそんなもの叩かんとどうにかならんかと言ひなされる人もあるの  
ですが、叩いた方が、私は見たことないのですけれども、細い繊維を叩  
いたことよって繊維が膨らむ、つぶれるかと思つたら膨らむらしい  
ですね。そうすると、膨らんだところへは、私の紙は木版画用と言ひ  
ましたね、だから絵の具がスムーズに入る。きれいな絵になるのです

ね。ですから、叩いた方がどうもいい版画ができるということ、やっぱり叩くのです。昔は、小さなペー  
ボール三つくらいを名人でも叩くことによって、時間的に言いますと二時間近く叩いたのですけれども、今は、  
なぎなたピーターというものを考案して下さって、これはどういう機械かといいますと、そんな機械というほ  
どのだいそれたものではないのですけれども、この楮の繊維は長いと申しましたね。その長い繊維を切ったの  
じゃ短くなるのですから、短い繊維が欲しいなら雁皮でも三極の繊維を使えばよいのですから、長い繊維を長  
いまま漉きたいということで、私は叩いて、ちぎると短くなりますから、広げるという感じにしてくれるなぎ  
なたピーターを使います。昔は二時間ばかり叩きましたが、今は二十分ほど叩いて、ですから時間短縮されま  
したね。私としてはそれが一番ありがたいのですけれども、そうして、なぎなたピーターで溶かして、それか  
らもう一回あく抜きというのをやるのです。

楮の中には、繊維のほかに含まれている澱粉質が  
たくさん入っているのですね。ですから、溶かした  
ままでも漉いてもかまわないのですが、漉くと昔の  
古文書は虫が喰って穴が開いてるのは、ミミズが這っ  
たみたいなのが開いてるのは、虫が紙の原料の中に  
あったものが好きだからそうなる。ですから、今は  
完全に水洗いして、水洗いしてから今度は、白土と  
申しまして真っ白の泥があるのですね、その泥を紙



叩 解



紙漉き(流し漉き)



同上(漉紙を重ねる)

の中に混ぜて漉きます。先申し上げた澱粉質を取り去って、今度は白土といって泥を入れることによって、虫には食料を除き、今度は防虫剤じゃないけれども泥は虫があまり好きじゃないのですね。ですから、最近の私の紙は虫が喰わないのじゃないかな。絶対喰わないという保証はできませんけれども、九十パーセント以上喰わないと思います。そのように、加工というのですか、紙作りをさせていただきますので。

それから、紙を漉きましたら、後は乾燥するだけです。その乾燥するのも昔どおりの銀杏板に張り付けるのです。これを今は鉄板乾燥と申しまして、ステンレスの鉄板がある。その鉄板に紙を張って乾燥することもできますが、やはり木版画は板張り乾燥が一番いいらしいです。

それから、仕上げといまして、出来上がった紙を一枚一枚検査します。その時が私の生甲斐といいますが、一枚一枚広げる、表裏を検査して「おお、おれの紙出来上がったぞ」というようなときに生甲斐を感じる。そ



乾燥

れがあるのと、それからすばらしい版画が出来上がって、時たま「すばらしいものができたら、岩野さん一枚上げましょう」といって送って下さったりすると、これだけの版画ができるのだから、やっぱりこの紙は誰かが受け継がなあかん、わしがやっぱりやらなあかんと思って頑張っているのですけれども、だいたい私の紙は、こういうことで出来上がってくるのです。

それと、越前奉書は汲み上げて、汲み上げるというの

はおわかりになりますか。漉き道具で汲み上げて、そして縦揺りはやるのですけれども、ほかの産地でテレビなんかでご覧になったかも知れませんが、横揺りをする所がありますけれども、越前奉書は縦揺りしかしない。鳥の子とか美術小間紙の人なんかでは、下の地合の紙を漉く漉き屋さんなんかでは縦でも横でもやりますけれども、奉書は絶対縦揺りだけで横揺りはやらない。それが、この越前生漉き奉書の特徴かとも思います。

それから、まず水が問題なのですね。水というのは軟水と硬水がございします。越前の水はどうも軟水らしくて、紙が柔らかくできるのですね。私が毎日紙漉きをやっていますが、上手ではない。このふわとした感じの紙ができるのは水のお蔭なのです。ですから、私の家族ぐるみ例えば、よその県へ引っ越して、同じ方法で紙をやってみても、今現在漉き上がる奉書はできないと思います。それは水のお蔭なので、私の技術が最高ではない、水が最高なのです。

この間、私の所には寿喜娘という酒屋さんがございします。昔は手漉きの漉きと娘と書いて漉き娘といったそうですが、これはあまりにも泥臭いということになって、今は寿喜娘と書いて「すきむすめ」というらしいのですけれども、その社長がおっしゃるのに、どこか名のある工業試験場へ寿喜娘さんの水を持って行って検査してもらいましたら、六甲の水というのが一番知られているミネラルウォーターではなからうかとおっしゃいましたけれども、その水よりもまだ良かったらしい。ですから、「越前の水は、特に大滝の水はいいのだから、いい紙もできるはずだし、私のお酒もいいと思います」と言って、少し遠慮なさりながらお話なさっていただきましたけれども、水のいいことは間違いないと思います。水のお蔭で私もこうして生きているのだなあと思う。それから、見学者が私の所にいらっしゃって、「おまえ、おまえの紙は楮の紙だな。いろんな説明を受けた

けれども、一口に言うとはどんな紙じゃ」と、そういうふうな尋ね方をされたことがございます。「これは難しいことですねえ」と私も言いながら、ちよっと考えて「白くてぼってりと厚く、しかも柔らかい」と申し上げましたら、「おまえ、うまいこと言うわ」とおっしゃって、お誉めの言葉をいただいたのですが、奉書という紙は、私の紙の話ですけれども、楮のもっている自然色でその白さを保ち、だいたい厚い紙なのですが、ぼってりと厚く、しかも柔らかい。柔らかい紙を軟水の水が作ってくれる。ですから、版画にいらしい。硬い紙に版画をしたのじゃ、やっぱり絵の具というのですか、スムーズに入っていくかない。やっぱり柔らかい紙に摺った方が楽ならしい。ですから、軟水の水で紙を漉いた方がどうもよさそうなので、今日まではまあ注文がありません。

それから、私の紙のファンがございまして、私の紙漉きをご覧になって、それからこの紙何になるのだというので、こういう版画ができますと見て見せましたら、「この版画をおれにも譲れ」とおっしゃったので、「私はこれを買ったのだから譲るわけにはいかん。それじゃ、版元へ頼んであげましょう」と言いましたら、「これを一枚取り寄せて欲しい。だけれども、これを版元から市兵衛の家まで送ってきてもらって、あなたが見て間違いないか見届けて、さらにこれをおれの家へ送ってくれ」、「先生、そんなこと言わなくても私が保証します」と言っても、「あかん」と言われて、そんなことを二度やったことがありますけれども、最近はやっと認めていただいて、「先生、送ることだけでも大変ですし、版元から直送させます」と、やっと納得いただきました。そういうことで、私の紙でできた版画なら買ってやるという人があって、私の紙のファンがあるということとは有難いことだと思っております。



それから、越前奉書というのは透かしてご覧になると分かると思うのですが、簾を編んである糸目が一寸間隔なのです。現在でも一寸間隔。ですから、もし浮世絵がございましたら、浮世絵をちょっと透かして下さいますと、だいたい一寸間隔で糸目があります。昔からずっと越前は、竹のそれが一寸間隔でしたが、ほかの県では八分の所もあったり、もうちょっと広くて一寸二分の所もあった時代があります。ところが、越前の紙があまりにもよく売れるので、外の県の漉き屋さんの人が全部一寸間隔にして、そして真似たというのですか、ほかの県でも一寸間隔にして、最近は全部一寸間隔にしましたが、昔はそういった時代があったようです。

それでは、こんなことを申し上げていいか悪いか分かりませんが、私の父のことを少し申し上げます。先程ご紹介でも、お父さんから厳しく教えられたというようなご紹介でしたが、実は、私の父の兄が私の家で働いていたのです。というのは、私の親父は体が健康なものですから、体格もよかったですし、ですけれども、お兄さんの方はちょっと病弱なものですから隣の屋敷へ分家をいたしまして、私の家で働いていました。その人がものすごく几帳面な人でしたので、私が紙漉きを習い始めた頃に、親父に習ったのじゃなくしてその伯父さんに習ったのです。ですから、見学者の人が今もおっしゃるように「お父さんは厳しい人でしたか」と言われますと、「はい、その通りです」と申し上げておきますけれども、実は何にも厳しくなかった。全部その几帳面な伯父さんに習ってしまったのです。ですから、親父が厳しく私に教えるまでに伯父さんに習ってしまったっておりますので、その厳しさは知りませんでした。

それから、私の父が言ったことに、「おまえは、よその紙を見に行くな」と言うのです。紙を習い始めてちょっと面白くなったというのですか、紙のことが少し分かりかけた頃だと思うのですが、分かりかけたから

腔例えば、隣の石川県金沢の二俣に紙を漉いている所があるからちょっと見に行こうか、それから隣は時々行きますけれども、ちょっと離れた所の紙屋さんに行こうかなと思って見に行くと、「ほかの紙を見に行くな」と言う。ですから私は、うぬ惚れるかもしれませんが、親父の言うことだから真に受けて、この紙はこんないいので、よそへ見に行っても何にも勉強することないのかなあと、最初思いました。ところが、だんだんやっている内に、美術小間紙、先に申し上げた模様の紙の紙屋さんの所へ見に行きますと、きれいな紙を漉いてらっしゃるのですね。いいなあと私も思いましたし、それから、何ですか模様の紙も漉いてらっしゃるのですね。ああして模様ができるのか、おれもやってみたいなあ、そういう時代があるのです。「どこどこがねえ、ああいう紙やってた。あれは儲かりそうやなあ」と言ったら、「ほれ、おまえにはよそへ紙見に行くなって言うたんや」と言う。ああ、なるほど。私が横道へそれたりすると、この紙が無くなってしまうと父親が思ったので、金の儲からない仕事を頑張らせるためには、よそへ見に行くなと言ったのだなあと、それを思いましたね。それほど、「よそへ見に行くな」と何回言われたかなと思います。

それから、見学者の中で、私の父親は昭和四十三年に国の重要無形文化財の指定を受けて、それから後は、ずっと約九年程文化財の認定のまま亡くなったのですけれども、その紙の文化財の指定を受けてから後、私のところへ見学にいらっしゃった人が、まさか地下足袋姿で、またゴム草履みたいなものを履いて、前掛けというのですか、お米屋さんがやっているようなのをして楮を煮たり、それから、漉いた紙を乾燥するために板に張り付けたりしておりましたのですね。そうすると見学者の一人が、まさかその姿で父がやっているとは思わなかったのか、「国宝がそんなにして…」と言われました。「絶対国宝とは言ってくれるな。おれは職人じゃ。

職人がなんじゃ国宝じゃなんて言ってくれるな」と言っていました。私も大きいのですけれども、親父も声が大きかったので、「そういうことは絶対言ってくれるな」と言って毎日頑張っていましたね。ですから、とっても偉そうにしない父であったと思います。

それから、昭和二十年に数え年で四十五歳で兵隊に行きました。その時に私が五年生ですから、何を言ったかと思いますが、そのうち帰るけれども、こんな四十五になってから、少し白髪があったのじゃないかなと思うのですけれども、「四十五になって、白髪をいただいてから兵隊に行くのやで日本は負けた」と、あっさりと言いましたね。そして八月に終戦。日本へ連れて帰ってやるといわれてナホトカに着きまして、昭和二十二年の四月までシベリアで残留兵として向こうで頑張ってきましたけれども、先申し上げたとおりの体力がありませんでしたので帰ってきました。しばらく、金の値打というのですか、そういったものもすぐく変わっていましたので、そういうことを勉強しながら、体の回復を待って、それから東京へ紙を買って下さるようお願いに行くのですね。そうすると、現在でも高い紙が昭和二十年代にはどうかと申しますと、食料難の時代です。そんな高い紙をだれも買ってくれる者も無いのですね。東京へ出て、頼んで買ってもらおう。そうして、また紙屋さんと版画屋さんの紹介を受けると、その家へまた行くというように、東京へ年に三回くらい行って、今みたいに新幹線ありやせず、片道十二時間くらいの汽車に揺られて得意先探しに歩いて、そして、この紙を守りとおしてきたのですね。ところが、その高い紙を、その時に食料難で食うものも食えないという時代に、こんな高い紙を買ってくれる人があったのですね。ですから、この紙を守りとおしてきましたし、幸か不幸か、昭和二十五年頃に朝鮮戦争が始まって、アメリカからたくさん兵隊が来られて、東京辺りたくさん来られて、

そうして、時々兵隊さんが本土にお帰りになる。また新しい兵隊さんが来るというような感じでした。紙の筒にくるっと丸めて一番恰好のいいもの、軽くて恰好のいいものというのが浮世絵だったんですね。軽く、しかも日本情緒がある土産物というので、飛ぶように売れたらしいのです。ですから、今度は得意先から「何をやっているのや。もっと早く紙をしてこい」というくらいに逆になりまして、東京へ行くどころではない。一生懸命頑張りまして、今日まではお蔭様で大量生産ができない紙ですから、今日までは注文もあります。有難いことです。

私に強く言った言葉があります。「絶対ごまかすな。手を抜くな」これはもう、月に一回くらいは聞いたことがある。というのは、なぜこれを私に強く言ったかといいますと、手抜きという言葉は、いわゆるごまかし。どういふことかといいますと、ソーダ灰で煮て塵を取って、そんな手間をかけているくらいなら、苛性ソーダで煮てさらし粉で晒して人工で着色すれば、私の紙と見たところ同じ紙ができるのです。現在、この方法でやっている人もあるのです。ですけれども、それをやったのじゃ木版画の百度摺り、二百度摺りというような版画に耐えてくれないので、「ごまかすな。絶対おまえはよその紙を見に行かんと、先祖代々の紙をやれ」ということで、いつの間にかやら、親父と一緒にへんくつになりました。

水上先生が「弥陀の舞」という小説をお書きになりましたが、この中ででてる頑固爺さんの弥兵衛さんという主人公は、どうも私の父親がモデルらしいです。また「弥陀の舞」という小説をお読みになったら、私の親父を思い出して読んでみて下さい。それから、津村節子さんも福井県の作家ということで、去年の春早くですか、「花筐」という本をお出しになって、紙の漉き方に、一番最初ぱっと汲み上げてさっとなげることと、

一番最後に適当な紙の厚さになって最後にボンと投げるしぐさが全く逆の言葉で書いてございますので、このことを、単行本に出来てからでなくて連載でございましたので、それを先生に申し上げましたら、それはいいことを教えて下さったということで、先生からその都度コピーやら、「文芸春秋」でしたか、その本を送って下さって、読んで少しでも変に思われるところは教えてくれということになり、少しばかりお手伝いしたような感じもありました。その中に、布袋に入れて繊維を洗うのだという、布袋に入れて洗うということは全くございませんので、そのことも申し上げました。

それから、今立町が力を入れてくれているのは、今立町といえば越前和紙ですから、和紙の里会館を造って下さって、そして、二百メートルもないでしょうか、その前の方へパピルス館というのを建てて、その間を通る道路を「和紙の里通り」といって、すばらしい通りを造って下さいました。そして、現在もうすぐ百万人達成になりますので、百万人達成記念「日本の紙展」というのをやっています。ひよっとしたら、この中から百万人目が誕生するかもしれませんので、一度紙漉きを経験しながら見て下さるといいのじゃないかと思えます。いろんな資料もございまして、昨年の五月には越前和紙サミットと申しまして、越前と繋がりのある産地の人を招いて大会を開催しました。越前和紙のことは、若い町長さんですが、「何ととっても今立町は和紙やでのう」というようなことをおっしゃって、我々のためにはすばらしい町長さんであると思えます。ここでお誉めをしておきます。

それから、後継者づくりというのがあるかと、皆さん心配して下さいますが、私の組合には青年部会というのがございまして、学校終わって、紙を習い始めてから四十歳までの人を青年部会に入っていたら、そ

して、どういう活動をしているかといえますと、毎年、カレンダー作りをやったり、それから、福井でいいますと産業会館とか、今度もボランティアフェスティバルというのが体育館でありますねえ、あの時にも出て行きますして、そういう所で紙漉きを実演し、皆さまに越前和紙の良さを知っていただくために、そういう行事に奮って参加することになっています。

私は、今言いましたソーダ灰も苛性ソーダも、そういったものは全部化学薬品でございますので、明治以前はそんな薬品は無かったはずですね。ですから、楮をいくら水だけで何時間炊いても柔らかくならない。じゃ、どうして昔の人は楮を炊いたかといえますと、あくのある草木灰、例えば、蓬とかお蕎麦を採った、お蕎麦の実だけを外しますと藁束みたいなものができますが、これは、あくがありますね。それから、蓬というのは七月の土用を済んでからの蓬、これは池田町辺りの山とか川原へ行きますと一メートルも二メートルも伸びたようなのがありますから、少しくらい雑草が入ってもいいからというので、蓬の灰を作るために、草を若い者に採ってきてもらいました。現在、その草木灰の中からアルカリ成分を取り出す方法を知っている者は、もう越前和紙では私だけになったのじゃないかなあと思いましたので、私の少しでも若いうちに、これを若い者に教えておく必要があると思ひまして草木灰煮の紙作りを教えたのです。

軽自動車四台に蓬の草を満載して、河原から採ってきて、それを原っぱへ広げて乾かして、そして燃しました。その燃した灰が何程もできない。一斗缶に一杯。それほど灰ができない。この灰がどれくらい要るかといえますと、ソーダ灰なら最初に申し上げたように乾いた原料の十二パーセントでいいのですが、この草木の灰、蓬の灰なんかですと六十パーセントの灰を要するのです。ですから、十貫目炊こうと思ひますと、六貫の灰が

要るのです。一斗缶に約一杯を逆算して計算しますと、八貫くらいの楮が炊けるということで、その技術を教え込んだのです。

まず、桶の下部に穴をあけ、八分くらいのパイプを差し込み開閉式にしておきます。桶の一番底に青杉葉、次にもみガラ、その上に蓬等の灰を入れ、その上から百度に沸いたお湯を入れるのですけれども、灰が立ち上がると困るから、防虫網みたいなものを上へかぶせて、灰が立たないようにして、最初少しづつお湯を入れていきますと、ぐつぐつと音がして、その灰が煮えるというのですか、ぐつぐつとなるのですね。そうしている間に、もみガラも杉の葉もだんだん、お湯ですからカサビクになります。そうすると、上へどんどんお湯を入れ、ある程度煮えたなあとと思ったら下のコックを開けると、そこから、最初は黒に近い程のアルカリ成分のお湯がでてきます。だんだん後になりますと、お醤油の色、薄口醤油くらいの色になりますけれども、それをリトマス試験紙に付けますと、ものすごくアルカリ分の強い色に表します。ですから、あくの強い蓬とか蕎麦の灰からはアルカリ成分が取り出せる。

その液体の中で、今度は楮を炊くのですね。ですから、この方法を絶対教えておきたいというので私が教えました。そして、すばらしい紙ができましたので、何にしようかなと組合も考えて、平成二年度の話なのですが、福井藩札を複製しようということになり、当時の作り方と同じ製法で作った紙だから藩札が一番よからうというので藩札を作りました。それがあまりにも見事にできましたので、色合いから何から厚みからものすごくうまくできましたので、本物と間違うと困るというので、「平成二年復刻」と書きまして一般に配布した。それほどいいものができました。ですから、この紙を青年部会の人に私が教えたというのは変ですけれども、

「どうだ、もういっぺんやるか」と私聞きましたら、「もう少し時間をおいてなら…」と。というのは、あまりにもたいへんな目に遭ったのですね。灰作りから塵取りから、たいへんな目に遭った。ですけれども、一応、もし私があちらの国へ行っても、だれかはやってくれる人があると、私は喜んでいるのです。

それから、これに味を占めた青年部会というわけではないのですけれども、ご存じのように県の無形文化財である、現在では三代目の方ですけれども、三代岩野平三郎さんが打雲・飛雲・水玉等の、岩野平三郎さんにしか伝わっていない独自の技法なのですけれども、これを青年部会がおねだりして教えて下さいと言いましたら、心安くお引き受けになって、若い者に技法を教えて下さいました。あれは私もやったことがないのですけれども、何か小指の所へゴムのサックをかぶせて、両指にかぶせるらしいのですけれども、痛いらしいですね。そして、ちよんと汲み上げて縁の所へカンカンと当てると、ご存じなかもしれません、この波が向こうへ行くのがあるでしょう。あれをやる時に手の小指が痛いらしいのです。ですから、ゴムをかぶせてやるのですけれども、それを会員全部が教わりました。私の息子も会員ですので、「やったか」と聞くと、「やった。なかなか難しいんですよ」。そのとおり、一遍や二遍やったかてうまくいきませんわね。「それを鍛錬してもう少しやれ」と言いましたら、「難しいんですよ」と言っていましたけれども、私は平三郎さんがここで若い者に、平三郎さんにしかできない技術を一回でも公の場所で教え込んだという、この勇氣というのですか、それはすばらしいと思っ頭の下がる思いをしております。

それからもう一つ、檀紙という紙はご存じですか。あの皺のある紙ですね。この檀紙というのは、やっぱり県の無形文化財で山崎吉左衛門さんという人がやっておられますが、これもその内公表してくれてもよさそう



なものだなあと私は思っております。教えてくれなかったら、私がある程度は把握しておりますので、しゃしゃり出るかもしれませんが。

それから、墨流しの技術というのは山田幸一さんという人がやっておられますし、その外、まだ二、三の人がやっておられます。この技術は青年部会の人の中でもやっている人がありますので、継承されていくことは間違いないと思います。私が思いますのに、だいぶ前の話で恐縮ですが、山田幸一さんが墨流しを水の上でやっていたら、義宮殿下がいらっちゃって、たまたま私が平三郎さんと親戚関係にもありますので、その時、私が写真を撮っておりましたので写真を写すという話になって、工場の中へ入って写させていただきましたら、義宮殿下は、何でこんなものができるとか不思議なような顔をしてご覧になっていたのが記憶にありますし、それから、殿下のお手を山田幸一さんが持って、墨流しの技術をやられ、出来上がった時には、こりなさっていたのも記憶がありますが、こういうことはすばらしいことだと思えます。この越前には、もちろん昭和天皇もいらっちゃったこともございますし、現在の天皇皇后両陛下も皇太子・同妃殿下の時にいらっちゃったことがありますし、私の工場には高松宮殿下と秩父宮妃殿下がご覧になりました。

皇太子殿下が、これは去年の話ですけれども、千葉県で江戸職人の集まりというのですか、博覧会場なんかの一部分に江戸職人の技みたいなのを披露するコーナーがあったのですね。その所に私の得意先のお方が木版画を摺っていらっちゃったそうです。そこへ皇太子殿下が行かれて、そこへ立ち止まられて、しばらく摺るのをご覧になっていらっちゃったそうです。最後のところで、「その紙はどここの紙ですか」と言われたそうなのです。これは越前で漉いております生漉奉書といって、岩野市兵衛という人の紙です。これはとても摺



先代市兵衛よりご説明を受けられる秩父宮妃殿下（昭和48年5月10日）

りやすくいいです」というふうな説明を申し上げたら、皇太子殿下は「紙は日本の文化だからね。その文化を守って欲しいと伝えて下さい」ということを申されたので、「今日、今すぐお知らせします」と電話がかかりましたけれども、誠に皇太子殿下のような方が日本の文化とおっしゃったことはありがたいと思いますし、今年雅子様をお迎えになりましたので、二人お揃いになってこの越前和紙の産地にいらっしゃらないかなあと、このように思います。

昔は、傘紙という紙を漉いていた時代があったのですね。それが洋傘ができて紙がいらなくなりましたけれども、提灯紙というのは懐中電灯というようなものができましたのでいらなくなりました。私は小さい子供の時に、膏藥を温めて伸ばして痛い所へ貼っているのを見てたことがあります。そういったものも今はサロンパスとか何とかで、紙がだんだんいらなくなりましたね。それは時代の移り変わりですからそ

のままでいいと思いますけれども、その代りにクリスマスカードなどというのは昔は無かった紙でございますし、ちぎり絵と、先言いました和紙人形の紙などというのも、最近ご婦人方がとても趣味の多い方がおりますので、こういう紙も需要は増えた紙です。無くなった紙がある代りには、こうした新しく希望される紙もございます。

それから、私の所へ、これもまた千葉県の話になるのですけれども、千葉県の版画を摺っている人が、最近の版画用紙は悪いという手紙が来たのです。これは困ったことだと思ひまして、「今お使いになっている紙を、すみませんけれども、マッチくらいの大きさでもいいし、はがきくらいの大きさでもいいし、こちらへ送ってもらえないか」ということを電話したら、そしたら、ノート一頁くらいありますか、黒一色で摺った版画が私の所へ送ってきました、この紙が悪いのですね。私はちょっと見て、紙の商売ですから、ああ、これは機械漉きじゃないか、これを手漉きだと思つて摺ってくれた者が間違いだということ、これは機械漉きでございます。手漉きはこんな紙ではございません」と言つたのですが、紙をもっと勉強していただきたいと思うのですね、買う人が。三百円の価値のある紙を三百円で買うのは、その人は得ですけれども、二百円の価値しかないものまで三百円で買う人がある。ですから、そういうふうな失敗があつて、越前の最近の紙が悪くなつたというお叱りごとを受ける原因になるのですね。ですから、もっとあなたが勉強して欲しいということ、言いはばつた言葉ですけれども言つたこともございます。そして、その木版画に「返却に及ばず」と書いてあるのですね。全く、私としては返しもしませんでしたけれども、今はどこにいったやらと思ひます。なぜかという、私の所にたくさんいいものがございますので、どこかに片付けてはあるかなと思ひます。

それから、最初ご紹介の中にありました越前和紙という映画を作りまして、私に姫田監督さんが、これは五十七分の映画だったのですけれども、私を見込まれて、そして「おまえを映画に撮るんだ」と、私そんなものはいやだという話をしましたら、「おまえと寝起きを共にしてでも頑張るんだ」というのです。それには参りまして、これじゃ仕方ないということで、少しでも快く、そして映画を担当するカメラマンはじめ録音する人も楽しい内に映画を撮らせてあげたいということで、一日や二日じゃないのですから、たいへんな目に遭ったのですけれども、このたいへんな目というのはちょっと取り消しますが、協力させていただきました、そして五十七分の映画ができました。これは、日本語版はもちろん、英語版とフランス語版を作りまして、そして、去年あたりはワシントンも行きましてし、一昨年ですか、去年はフランスも行きましてし、今年はもうすぐドイツのフランクフルトで越前和紙海外展というのをやるのです。これは、もちろん県のご協力もいただき、町のご協力もいただいてやるのです。この時に、そのビデオをずっと流しておくらしいですね。そうすると、いつの間にやらテレビの前が満員になるほど映画がいらしいのですね。何でこんなみっともない男が映っているのに人気があるのかなと思いましたが、やっぱり原因があるのですね。というのは、分かりにくい言葉でお話していてもさっぱり分からないのですね。ですから、誰でもお分かりになるようにというようなことで、その映画ができた時に、聞き手と話し手というので、聞き手というのはもちろん監督さん、話し手というのは私が東京のスタジオまで行って話を吹き込みましたのですけれども、自分の映画を自分が話すというのは、これはまたたいへんなことで、恰好悪いというのですか、あまりいいものじゃないですね。自分が映っているのですよ。それを自分で説明するのです。ですけども、私は何とかなるわという横着な心が行ってきまし

て、とにかく今のところ評判がいいということ、私も喜んではいるのです。

それから、ワシントンで映画を観たという人が、カナダの人なのですけれども、日本へ行ったら必ず映画の男に会ってこようと思つて、わざわざお二人、それもご婦人ですけれども、みえまして、「これも今年最高の思い出や」と言つて、「私の紙をとにかくくれ」、「カナダから来たのだからプレゼントしましょう」ということで、一枚ずつ差し上げた。差し上げただけならいいのですけれども、「サインして印捺して下さい」と言う。私も一躍スター並。そして行きましたけども、そんな人に何か人気があるらしいですね。去年のフランスなんかでは、「このビデオのアーチストは来てないのか」と聞かれたそうで、石川理事長は「おまえが行つたら、一流のアーチストだったぞ」と、おっしゃっていました。

それから、越前は大きな紙を漉くのが好きなのか、平成大紙は七メートルくらいに四メートル三十ですか、そんなでかい紙もやったことございますし、私は偉大だと思つるのは、大正二年の時に初代岩野平三郎さんが、三間四方といいますとだいたい畳十八畳ですね、こんな大きな紙をお漉きになったのですね。そして、その時の言葉に「漉こうと思えば、どんな材料からでもできる。また、こしらえてしまふ」という、初代平三郎さんのお言葉。ああ、これは私もそうだなあ。どんなことでも私もこれにチャレンジせいなあかんと思つて、初代平三郎さんを崇拜するような気持ちをもっております。

それから、おまつりの時には、越前和紙まつりなんていいますと、何か変わったことをせないかんというので、紙のトンネルを作りました。段ボールでトンネルの恰好に作つて、上は何日も雨が降つては困るというので防水加工紙を貼つて、それも今は、簡単に機械でラミネートを入れて防水加工した紙ができるのですね。

色もピンクとかグリーンもありましたし、ブルーもありましたし、カラフルな外回のすばらしいトンネルを作って、中は真っ白な紙を貼って、越前和紙のいろいろなものを展示しまして、まるでトンネル美術館みたいな、博物館みたいなものを作ったこともございますし、それから、紙だけで一切何も使わずに、直径が二メートル、直径がこんなでかい太鼓を作りました。そして、まずミニチュアの太鼓を作り、どんな紙を使えば一番いい音がするかということで、いろんな紙を小さなミニチュアの太鼓に貼って、パンパンと叩いてみたら、やっぱり雁皮の紙が一番いい音がするのですね。ですから、雁皮の紙を一枚くらいでは困りますから、何枚も貼り合わせて、そして両側へ貼って、それを引き締めるのも全部、紙を手で編むわけにはいきませんから、昔の足踏み式の縄編み機がありますね、あれで紙を編んで、その編んだ紙の縄でギュッと両面を引き縛る。ちょっと考えられもせんようなことをやってのけるといって若者もおりますので、まだまだ越前和紙は期待できると思います。

最後になりますけれども、これだけお話をさせて下さい。一枚の私の紙から、十万円も何十万円もの作品ができるのですから、私の紙でできた木版画を、その人が何十万円しても買ったのですから、それを子供に伝え孫に伝えていっても、紙に故障が起きない紙を作って差し上げなければ何十万円もの作品に傷が付くということですから、私は極力薬品を使わないように心掛けて紙を作っております。それから、ある会合で一口ずつ自分の紙に感じていることを言えとおっしゃったので、会合ですからもう最後になりましたので、ごちそうがテーブルの上に並んでいたのです。一口ずつというのですから、皆簡単なことを言ってくればいいのに、前の人

が四、五人長々と喋ってくれた人があったので、私の順番がくる時までにはもう時間が無く、ごちそうを目の

前にして、私は何にも物申さんと済んだ覚えがございません。その時に私は心の中で考えていたことは、「白い紙だけで見れる紙を作りたい」と申し上げようと思っていました。白い紙だけで見れる紙というのは、模様のない紙がきれいであればいいし、染紙であれば染がきれいであればいいと思うのです。ですから、私は白い紙しか漉かないのですから、「白い紙でもいいなあ」「見れるなあ」という紙を作りたいという気持ちがあります。ですから、その白い紙のいい紙を作るといことは、和紙の和、すなわち穏やかな心をもって、家族ぐるみ穏やかな気持ちで紙を漉き、今後も漉き続けたいと思います。私の父が晩年に、人様から頼まれますと「和紙とともに生涯を」というような書を、もちろん自分で漉いた紙に、「和紙とともに生涯を」と書いて印を捺して、希望される人に差し上げていました。私も、和紙とともに命ある限り生き続けたいと思います。どうか、田舎者ではございますけれども、こういう気持ちで頑張っている職人もあるのだなというようなご理解をいただきます、長い間ご清聴ありがとうございました。

紙漉きをご覧になりたいという方がございましたら、紙漉きの現場でご説明しますので、私の所へ来て下さい。お願いをしておきます。私の所へ来られた人皆さんに、どんな偉い人でも初対面の人でも、みんな一緒にお話をさせていただきたいと私は思っておりますので、どうか来て下さいませ。

【会場からの質問に答えて】

\* 漉紙を重ねても、くっ着かないのはなぜですか。

流し漉きというときには、必ずトロロアオイの液体を使って漉くと申し上げましたね。あの液体を使うというのはどういうことかといいますと、あの漉き舟という四角い中に、まず何が入っているかといいますと、水と、それからパルプを漉く人はパルプというのですか、私の場合は楮です。それから、白土といって白い泥が少し入っています。この三つだけをかき混ぜても、竹の簾で汲み上げてもザッと水が漏る。ですから、そのザッと漏るのを時間かけて漏るようにさせるために、ちょっと言葉は悪いかもしれませんが、トロロアオイの液体を入れて、あの中を少し粘りがあるようにする。たくさん入れても困る。少し粘りがあるようにする。そして紙を漉くのですね。漉いて上がったところが紙の表なのです。紙をひよいと少し立てて水をすうと切るのですね。そうすると、ここが表ですから、まだ表はできてても表面が出来上がらないのですね。ですから、面作りといっているのですけれども、表面作りをして、完全にこちらへ持っても次の紙にくっ着かないように、いわゆる層を作ってこちらへ持ってくる。ですから、漉いたら必ずそっと立てて、さあっと、これもちょっとちょっと、こんなのが駄目です。さあっと切って降ろして、そしてこちらへ持ってきてかぶせる。ですから、層作りをするから一枚一枚めくれるのですね。言葉では簡単ですが、実は私も不思議でなかなか。私の所へいらっしゃっている人が、ご質問のとおり、これ全部くっ着いてしまわないかと言いなさる。くっ着かないのです。これは、やっぱり表面作りをトロロアオイの液体が作ってくれて、こちらへ持ってくるから



くっ着かない。でも私も不思議なのです、これは。襖の紙とか美術小間紙みたいな紙は、必ず紙をやったら一枚木綿の布をひいて、そこへ紙をやって、また布をひいてと、やるのですね。紙、布、紙、布といきますから、紙と布はくっ着きませぬね。奉書類の紙は次から次へと重ねていくのですね。私も不思議なのですけれど、くっ着かない。くっ着いてくれたら、私も朝から晩まで何したことがわからない。

このトロロアオイの液体のことを、紙漉き屋さんの言葉で「ねり」というのですけれども、ねりの入れ具合が多くても困るし少なくとも困るのですね。ですから、「七つ八つから紙すきならて…」紙漉き唄ですね。「ねりの合い加減」というのは、ちょうどいいころ加減になったということを含い加減というのですね。「七つ八つから紙すきならて ねりの合い加減まだ知らぬ」こういう唄があるのです。ですから、そのねりの液体の入れる分量というのは難しい。だいたいお分かりになりますか。またいっぺん、私の所へ来て下さって、特にお話をさせていただきます。遠慮なく来て下さい。

**\*平成大紙などの一枚漉き大紙は、どのようにして漉いたのですか。**

平成大紙というのは、横が七メートル十に縦が四メートル三十じゃないかと思うのですけれども、その一枚漉きを作ったのですね。この全部の大きな枠を作ったのですから、枠も作ったし竹のひごも作ったのですから。あの紙は最初に申し上げますと、あの当時、一枚百十五万円だったのですから、ですから、こちら側と向う側と六人ずつくらい、十二人くらい漉き道具をつかんで、つかんでといっても、手の巾いっぱいくらい大きな下の枠と上の枠をつかんで、もちろん、ここまでくらい、何というのですか、があっと汲んで向いへさ

あっと水を動かさないといかんですから、よいしょという掛け声で水を向いへやって、そうすると向うの人が、この行った水をこちらへ跳ね返して戻してくれないといかんですから、あっちの人とこっちの人と十二人が呼吸を合わせて、そしてやったのですね。そして、ある程度厚さができて、いつまで漣くのかわからない。だれか一人リーダーがいて、合図した時に、さあっと向うへ流れていったので終りという合図をします。その合図で今度で上がるというのが分かる。ですから、上がるといふのにまた一遍やるという人があると、これがばらばらなことではいかんですから、十二人が心を一つにして漣いたのです。そうして、この両端を、ものすごく重たいですから、今はウインチとかクレーンというようなものがありますから、この上へつるして、今あの人がおっしゃるように、だいぶ水を切ったからの話ですけど、ずうっと動かしてきて、こちらの方で紙を板の上に降ろして、それから布をひいて、またこちらで漣いたのでですけど、その動作というのは皆機械でやった。漣くのは手でやりましたけど。私はカメラも好きだったのでですけども、今は少しハミリに凝りだして、ハミリやってるのでですけども、それをビデオに撮りましたけど、実にすばらしいものでした。

テレビでご覧になりましたか。こっちは六人、向う六人でやったのです。ですから、一枚百十五万円、当時百十五万円、私は儲からなんだなあと思う。なぜかという、材料費から準備から、ものすごくかかる。漣き上がった紙を今度は乾かさないので、自然に乾燥するわけにはいかんですから、私は乾燥は見なかつたのですけど、何らかの板に張って乾燥したのです。巾五メートル以上もあるような板にどうして張ったかと聞いたら、斜めにしといて半分張って、逆さにしてといったか、どうかしてまた半分残りを張ったというのですね。私、その張るところが見たかったと思うのですけども、それは大変なことをなされたと思います。

ほかへ行ってどんどん売れるわけでないし、百十五万円そんな高いものじゃなかったのじゃないかと思えます。

**\* 書道用紙などは、しばらく寝かせて使うのがよいと聞きました。**

紙はですね、本当は漉き上がったときよりは、半年ないし一年くらい寝かせてからお使いになるのがいいと  
いっております。けれども、三年も五年も前だということになりますと、例えば、そんなに保存をなさってか  
ら書くということになりますと、これはひょっとすると、私は言いにくいことなのですけれども、最近たくさ  
んの薬品を使って紙作りをしますと、早く使う方がよいでしょう。どこか二階の、なるべく湿気の少ないよ  
うな所に保存なさると、ある程度はもつと思います。やっぱり薬品の成分がどうしても紙の中に残りますから、  
なるべく早く使ってください。基本的には寝かせて使うといいと言われていきます。最近、薬品を使い過ぎた紙が  
ありますからね。紙屋さんとしてはこんなことは申し述べたくないのですけど。

**\* 紙漉きには大量の水を必要とするそうですが、どこから供給しているのですか。**

私は一番恵まれているといえますのは、山から流れて来る谷川の水もございすし、それから井戸もござい  
ますし、五年程前にボーリングをしましたのが八分のパイプがございす。びゅっと二十四時間出ますし、で  
すから私は水に恵まれているのですけれども、今は大滝の上の方にダムをこしらえまして、その水も使ってお  
りますし、あまり渇水時になりますと、物を洗うとかそういうことだけは水道みたいなものをお使いになる  
のです。ですけれども、紙漉きの漉き舟の中へ入れる水は、やっぱり地下水なり山水などをお使いになる。

の所は、だいたい皆さんがお困りになってないのかなと思う。今年なんかは特に雨が降りましたので、水はたくさんあるのですが、注文が少ない。世の中こんな具合にできているのです。日照り続きの時にはかえって忙しい。これは、意地なものです。こういうふうにできている。何か私の言い方が悪いかもしれませんが、そういうふうなのです。だいたい、今のところ皆さん地下水とか谷川の水で賄っていらっしやると思う。私は一番大滝でも奥の方に住んでおりますので、まだ人様のお使いにならない水ばかりで、というのは、私が使った水を排水しますと、それがまた地下へ潜ったら、ずっと下の人はその水をひよっともしたらまた再利用ですから？、私は大滝の一番奥の方に住んでいるので、ある意味では幸です。

先の撮影なされた東京の映画のスタッフが私の所へいらっしやる時には、必ずポリ容器を持っていらっしやるので、水を十リットルくらい詰めてお帰りになる。何でそんなことをするのかと言うと、「岩野さんの水を持って帰って東京でコーヒーを沸かすと、インスタントがものすごくどこのコーヒー店で飲んだほどおいしい」と言う。それはその筈なんで、東京は私もその映画の音入れに行った時に、実にまずい水だったですね。だから、コーヒーがおいしくなるのは、いわゆるミネラルウォーターの最高の水だからだと思います。また私の所へいらっしやいましたら、一口飲んでいって下さい。本当においしい。私は毎日水を飲みます。私はこんな四合ですか、杓一杯くらいを毎日真冬でも飲みます。

【最後に】

今紙漉き唄というのをちょっと話しましたので、一つだけ紙漉き唄を唄わしていただきまして、終らせていただきます。皆さん紙漉きに興味がある方ばかりで、だんだん長くなりましたけれど、それでは、越前紙漉き唄… 神の授けをそのままついで 親も子も漉く孫もすく

紙漉き唄 (斎藤岩雄著 『越前和紙のはなし』 より)

五箇の女郎衆は茶わんで茶づけ 色は白くても水くさい  
五箇のめろ衆は何食て育つ のり粕やきもち食て育つ  
神の授けをそのままついで 親も子も漉く孫もすく  
川上さまから習うた仕事 何でちやかばかかえらりよか  
五箇で生まれた紙すきならて 横座弁慶で人まわす  
七っ八っから紙すきならて ねりの合い加減まだ知らぬ  
紙の習いぢや来ておくれるな お目が散ります邪魔になる  
紙の習いに御主人さまに 御損かけたが忘れようか  
五箇は太政官じゃ御金札御用じゃ 笠をぬがせ木戸の内  
五箇の女郎衆はお公卿の性やら みすを巻いたり広げたり  
しまえしまえと日ぐらし鳴けど しまい仕事でしまわれぬ  
嫁を貰うなら紙漉き娘 仕事おはでで色白で  
清い心で清水ですいて 干した奉書の色白さ  
お殿さまでも將軍さまも 五箇の奉書の手にかかる  
人は盆待つ祭を待てど わたしゃ師走のでぎょう待つ

## 講師紹介

岩野市兵衛（いわの いちべい）

昭和八年 福井県に生まれる。幼名市郎。

同二五年 家業の紙漉きを継ぐ。

同五三年 越前和紙伝統工芸士（抄紙部門）に認定される。

同 名を変更する（九代目市兵衛）。

現在 福井県和紙工業協同組合理事。

- ・ 伝統的な越前生漉奉書の技法を頑なに守り、楮の特性を生かした木版画用紙は、楮紙の絶品として高く評価されている。
- ・ 近年、ポストン美術館保管の浮世絵の復元や、映画「越前和紙」への出演など、和紙を通じて日本の伝統文化を広く世界に紹介している。

本書は、平成五年九月十九日  
フェニックス・プラザ（福井市）  
で行われた第二回文化講演会の  
速記録を、著者の校閲を経て刊  
行したものである。

文化講演録 第二輯

和紙のはなし

平成六年三月発行

発行者

福井市立郷土歴史博物館

福井市足羽二丁目八一―一六

電話 三五―二八四五

印刷所

河和田屋印刷株式会社